笑顔のひろば

vol. 39
2018年　新年号
川崎協同病院
広報誌
http://www.kawasaki-kyodo.jp

座　談　会　新春に問う

シームレスな地域医療の実現へ向けて

急性期病棟の一部を地域包括ケア病棟に転換してから３年目。川崎協同病院では、目標とするシームレスな地域医療の実現をさらに推し進めています。田中久善院長、佐藤秀樹事務長、齋藤朱美看護部長が、地域と病院をつなぐ最前線で働く地域連携室の川口洋子師長、高橋靖明課長をまじえ語りあいました。

佐藤　2018年は、６年に１度の医療保険と介護保険の同時改定、第７次地域医療構想・地域医療計画が実行される重要な年です。国が地域包括ケアシステム「どこに住んでいても適切な医療・介護を安心して受けられる社会の実現」を推進する中、地域のみなさんが安心して暮らせるために当院がどのような役割を果たせばよいでしょうか。

田中　当院には、急性期病棟・地域包括ケア病棟・障害者病棟・回復期リハ病棟という４種類の病棟が機能を果たしています。この中の回復期リハ病棟や地域包括ケア病棟は、地域の急性期病院での治療を終えた患者さんが在宅への復帰まで必要な生活調整やリハビリテーションによる機能回復を行います。地域の急性期病院と連携しこの役割をしっかり果たしていきたいと思っています。

田中院長

川口　そうですね。転院の依頼を受ける地域連携室としては、当院が地域の急性期病院との連携を果たすことが大切だと感じています。

佐藤　国は、看取りの場を在宅や介護施設にシフトすることをますます強化していくとし、質の高い在宅医療の提供を求めています。今後の在宅医療はどのようになっていくでしょうか。

田中　在宅部門は、同法人の協同ふじさきクリニックと連携し訪問診療を担う一方、地域の開業医の先生方や介護系事業所とも連携し、入院患者さんの退院後の療養を支えています。在宅－入院－在宅とシームレスな医療・介護を展開できる地域密着型病院を目指していきたいですね。

川崎南部地域で、シームレスな地域医療を担える病院としての特性を堅持していきたいと考えていますが、2025年問題を見越して、不足する在宅医療部門を拡充することが求められています。

佐藤　在宅医療部門の拡充という点では、機能強化として、今年は訪問リハビリテーションの検討をはじめます。また、在宅医療を支えるため、訪問診療を受けている患者さんの定期的な検査や評価を行う取り組みを昨年より試験的に始めていますので、今年は整備を進め拡充を目指します。

佐藤事務長

座談会 新春に問う シームレスな地域医療の実現へ向けて

佐藤　2018年、看護部門は、当院に求められている役割の中でなにをどう実践していきますか。

齋藤看護部長

齋藤　地域包括ケア病棟を開設して1年経ちました。開設当初、戸惑っていた看護師も、経験と学習を重ね、現在は、病棟の機能と役割を果たせるよう頑張っています。シームレスな医療・介護を目指し、入院時から在宅部門の医療・介護関係者とカンファレンスを行い、在宅復帰支援を行っています。在宅部門の医療・介護関係者との顔の見える看・看連携の強化もしていきたいと思っています。

情報を多職種で共有し、患者さんやご家族の意志を尊重しながら、退院支援を実践していきます。さらに、退院前・退院後訪問を実施し、住宅環境や在宅での問題点を把握します。これが当病院の強みであるチーム医療と多職種連携の実践そのものだと感じています。

佐藤　入退院のマネジメント部門でもある地域連携室師長として、在宅復帰支援、退院支援という点で川口師長いかがでしょうか。

川口師長

川口　地域連携室看護師としては、患者さんの病状の把握はもちろんですが、生活背景もきちんと捉えて支援していくことが大切です。退院支援の必要な患者さんを早い段階で把握するためには、外来看護師やケアマネージャーなど他職種と連携をとって情報を共有することも同じです。看護師は患者さんの入院生活や退院後の生活に対する「思い」を知り、できるだけ患者さんや家族の要求に応えられるような退院支援を行いたいと思います。

佐藤　地域包括ケアシステムの推進で、病状により医療機関を転々とすることがあり、患者さんは、「自分の療養は最終的に誰が責任をとってくれるのか」といった不安感を抱くようになってきたようです。当院では、少しでも不安感を軽減できるように、地域連携室にソーシャルワーカーを配置しています。相談課高橋課長いかがでしょうか。

高橋課長

高橋　今後ますますソーシャルワーカーに求められる役割の重要性が高まると実感しています。これまで以上に入院時からの早期支援・多職種多機関連携を重視していくことで、患者さん、家族にとって安心した生活が送れる支援が必要です。また、人権意識を高め、より困難な状況にある人たちにとって安心できるよりどころとなれるような質の高い支援を心掛けていきたいと思っています。

佐藤　地域の問題として、格差社会の影響による貧困がジワジワと広がってきており、困難を抱えている人が増えています。貧困による健康被害や自死といったことが起こらないように、町内会住民との密な情報交換で関係を作り、人権意識も高めて行きたいですね。

齋藤　看護部門も、看護師は病院内にとどまらず、地域での健康チェックや町内会のおまつりに参加し、住民と一緒にまちおこし・まちづくりに参画しながら、地域に貢献できる看護師を育成したいです。

佐藤　「シームレスな地域医療の実現を目指す」というのは、言葉にするのは簡単ですが、一朝一夕でできるものではなく、今後しばらく続く目標です。地域包括ケアシステムの中で地域密着型病院としての役割を果たすために今年1年目標に向かって頑張りましょう。

入院しても「お正月」を患者さんに提供する食事は常に工夫

あくしょん action

日頃から、患者さんに提供する食事は、ひとりひとりの体調にあわせて、みなさんに楽しんでいただけるよう、工夫を凝らしています。

朝昼晩のお正月料理

そのひとつとして、季節や年中行事を感じてもらえるような行事食を年間 12 回実施しています。お正月には、お雑煮を「餅」がのどにつかえないようにと、粘りつかず噛み切りやすい特別なモチを使用し、多くの方から好評を得ています。

おせち料理は、代表的なものとして、紅白かまぼこ、伊達巻、きんとん、黒豆、数の子なます、海老の姿蒸し、鯛のゆずこしょう焼き、豚肉の角煮、煮しめなどを提供しています。

また主食は、白飯だけではなく、五目ちらし寿司やカニご飯などを組み合わせています。「目新しい感じで、おせち料理の雰囲気を楽しむことができました」という感想をいただきました。

こうした食事によって、少しでも入院中の気分転換になればと願っています。

川崎協同病院 栄養科　佐藤 弓扇子（ゆみこ）

STAFF「もうひとつの顔」

琉球舞踊に出会って

川崎協同病院 リハビリテーション科　**紙谷 ちひろ**

川崎協同病院に勤務して６年目になります。みなさんは琉球舞踊ってご存知ですか？紅型（びんがた）という鮮やかな着物を着て踊る、沖縄独特の踊りです。

私が琉球舞踊を知ったのは、大河ドラマ「琉球の風」を通じてです。ドラマの中で、首里城の赤と白に彩られた庭で踊る舞を見て、その美しさと凛々しさに憧れました。「血筋なのね」と、母には笑われました。私の母方の祖父は沖縄出身だったからです。

そこからずっと、私は川崎にある研究所に所属して

正月のイベントで披露（左）

優しい笑顔でリハビリを行う

琉球舞踊を習っています。毎年、発表会やイベントなどへの出演があり、そこに向けて、研究所の仲間たちと週 1、2 回稽古をしています。稽古は厳しいですが、先生も仲間もとても仲良しです。

琉球舞踊には、宮廷で踊られていた古典、地方の人々の生活を表現した雑踊（ぞう）りなどの種類があります。今年の正月のイベントで、初めて、古典の名曲、松竹梅の竹の役を頂きました。とても緊張しましたが、無事に終わって、仲間から「とても良かったよ」と声をかけられたときは、本当に誇らしい気持ちになりました。

まだまだ未熟で、習うべきことは多いですが、私に自信を与えてくれる琉球舞踊をこれからも続けていこうと思います。

地域連携室の

おじゃまします！

地域の中でみんなで育てる
～だれもやらないから自分たちでやる～
療養通所介護まこと

病院は地域との連携が何より大切。近隣の医療、福祉関係の施設や機関を訪問し、紹介していきます。この間しばらくお休みをしておりましたが、今後は隔号で紹介していきます。第 16 回は「療養通所介護まこと」です。

（取材：地域連携室　高橋靖明）

「療養通所介護まこと」は、医療ケアが必要な重症心身障害児たちが通うことができる、療養通所介護事業所をはじめ、児童発達支援、放課後デイサービス、生活介護、訪問看護ステーションのサテライトという５事業を行っています。

川崎大師のすぐ近くにあるごりやく通りに面したところにあります。事業所内は明るく清潔感があり、訪問した時期が 12 月だったので、クリスマスの飾り付けがされていました。全体として家庭的な温かみのある空間だと感じました。

これらの事業を運営する医療法人誠医会は、訪問看護ステーションで医療ケアが必要な子どもたちに関わってきました。人工呼吸器の装着や気管切開など、医療依存度の高い子どもや重度の障害をもつ子どもを在宅で療養していくことは、介護者の負担が大きく、外出の機会も少なくなります。

同法人では、介護負担の軽減するレスパイト機能をもつ療養通所介護事業所の役割が大きいと感じていました。また、子どもは成長していく過程で自分の所属する新しい集団を見出していく、そのための自分の居場所を作りたいという思いがありました。しかし、地域の中にそういった施設がなく「ないなら自分たちでやるしかない」と、2016 年８月に「まこと」を開設しました。

利用定員は９人。平均利用者数は６人で、多くは医療ケアが必要な重度の障害をもつ子どもたちが利用しています。

クリスマスパーティーを盛り上げるスタッフ

自宅で介護をする上で入浴介助はとても大変なことです。「まこと」では少しでも家族の負担を軽減しようと、すべての人に入浴介助を行っています。また、楽しく有意義な時間を過ごしてもらえるようにと、看護師、リハ担当職員、保育士、介護福祉士、臨床心理士、介護職員といった多職種が連携し、それぞれの専門性を活かした支援を行っています。

多職種で協働することで、視野が広がり、互いに成長できることでよいケアが提供できると管理者の島田氏は話します。

今後は、「通所」だからこそできる時間をかけたケアやリハビリテーションによりいっそう力を入れていくそうです。

●川崎協同病院へひとこと・・・

医療型特定短期入所事業で同じような利用者の方を一緒にケアされているので、今後も連絡を密にとって互いが連携してやっていけたらいいと思っています。訪問看護の利用者の方もお世話になっています。今後ともよろしくお願いいたします。

●おじゃまして・・・

スタッフの方一人ひとりの専門性や個別性を大切にしながらも連携し、それぞれの強みを生かしてケアをおこなっている雰囲気が随所に感じられました。

医療法人　誠医会
療養通所介護　まこと
管理者　島田　珠美　氏
川崎市川崎区大師駅前１－２－９
電話　044－280－6676

笑顔のひろば
vol.39　新年号
発行：2018 年 1 月 25 日　川崎協同病院地域連携室
川崎市川崎区桜本 2-1-5　TEL:044-299-4781（代）　FAX:044-299-4788　http://www.kawasaki-kyodo.jp